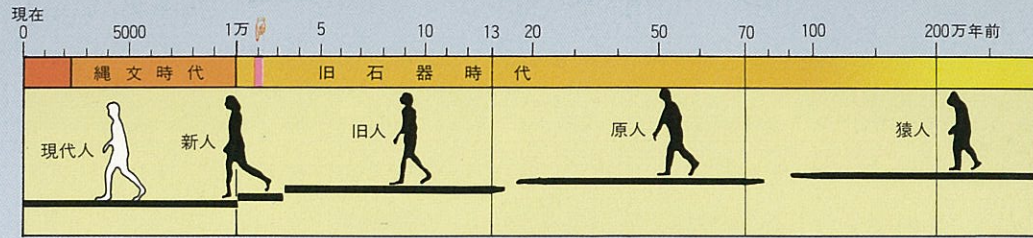


2万年の時を越えて

よみがえる 氷河期の富沢



人類の歴史と富沢の時期

氷河期の富沢の風景

—富沢から北東をみる—

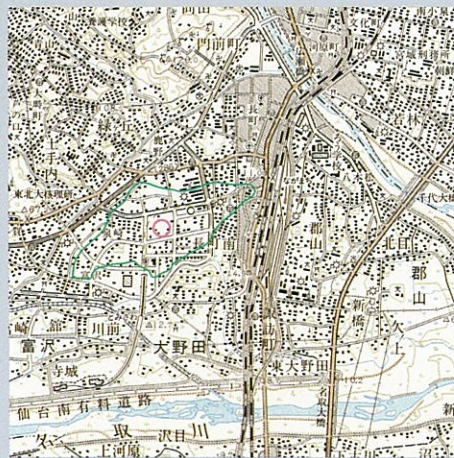


富沢遺跡のまわりの地形のようす

2万年前の富沢は沼や湿地の多いじめじめした土地でした。湿地やわずかに乾いたところにはトウヒやグイマツなどの林がちらばり、その間には草原が広がっていました。ここにはシカなどの動物が越冬のためにおとずれており、旧石器時代の人々にとっては絶好の狩場となっていたようです。

当時の風景を絵にしてみました。

早春の季節に、越冬していたシカを求めて狩人たちが富沢にやってきました。そして彼らは今、沼地で足をとられた1頭のシカをやりで捕らえようとしています。ほかのシカの群れは一目散に逃げていきます。近くの大年寺山あたりでは扇状地がつくられています。遠くには広瀬川が、はるか遠くには七ツ森がみえます。



富沢遺跡の範囲と旧石器時代の調査地点



細野修一画

氷河期のタイムカプセル

富沢遺跡は青葉山丘陵と名取川や広瀬川に囲まれた低い土地にあります。以前は主に水田跡の遺跡として知られていましたが、昭和63年の調査で初めて、旧石器時代の人々の生活跡が、生々しい樹木や動物のフンなどとともに発見されました。当時の生活跡と自然がまるごとタイムカプセルのように保存されていたことは世界的にもめずらしいことです。これまでの研究をもとに旧石器時代の人々の活動とそれをとりまく環境を復元してみましょう。



▲姿を現わした氷河期の世界
○はたき火と石器づくりの跡 ○は石器だけが出たところ

旧石器時代の 人々の活動

旧石器時代の人々は富沢に何のために来て、富沢でどんなことをしていたのでしょうか。



▲たき火跡（白いヒモ）と石器が出ているところ（竹ぐし）

たき火

木を燃やしてできた炭のかげらが直径70cmの範囲からまとまって見つかりました。マキはグイマツという木でした。近くの林から集めてきたのでしょう。土にはあまり火を受けた痕跡がみられないことから、短い間のたき火であったと考えられます。



▲たき火跡（黒い炭が散らばっている）

石器が出ているようす



つなぎ合わせると元の石のおおきさに



ハンマーに使った石

石器づくり

たき火跡のまわりからは100点以上の石器が見つかりました。その大部分は黒色の石でできており、つなぎ合わせると大きな石のかたまりになりました。近くからは石のハンマーも出ていますので、ここで石を打ちわって石器づくりをしていたのでしょうか。

動物を切る

石器の中には動物のあぶらがついていたたり、切ったり削ったりした時のきずやすりへった跡を残すものがありました。ここで動物の解体がおこなわれていたものと考えられます。

▼あぶらがついている石器



▲動物の肉や皮を切った跡（顕微鏡写真）



▲石器が入っていた穴

石器を入れた穴

たき火跡の近くには直径17cmほどの穴が掘られており、中には6点の石器が入っていました。何のために入れておいたのかははっきりわかりませんでした。

捨てていった石器

たき火跡から少しはなれたところからも、2ヶ所で石器が出ています。1ヶ所からは1mぐらいの範囲から石器が10点出ています。いらなくなった石器を捨てていったものと考えられます。



▲石器が出ているようす

氷河期の富沢の風景

—富沢から西をみる—

富沢にトウヒやグイマツなどの林があったころ、旧石器時代の人々は林のとぎれるあたりのやや小高いところで、たき火や石器づくりなどをしました。2万年前の富沢は今よりも平均気温が7～8℃低く、現在の北海道の中～北部に近い気温でした。また、寒暖の差が大きく、雨が少ない大陸性に近い気候だったようです。

当時のようすを絵にしてみました。

早春のある日の夕暮れ近くに、3人の狩人はここでキャンプを始めました。彼らは近くの小枝を集めて火をたくと、用意してきたほし肉を焼き、それから煙のこない風上の方で作業を始めました。次の狩りの準備のために1人は石器づくりを、1人は新しいやり先をとりつける作業を行っています。もう1人は夕食のためか捕えたばかりのウサギを解体しています。すぐそばにはやりや石器づくりに必要な道具などを入れておく皮袋が置かれています。目をあげると近くに太白山が、はるか遠くにはまだ雪の残る奥羽山脈の山々がみえます。



© Shuichi Hosoko 1992

細野修一画

富沢の環境

2万年前の富沢はどんな土地で、そこにはどんな植物が生育し、どんな生きものがいたのでしょうか。



樹木の出ているようす

低く、じめじめした土地

当時は山の近くでは扇状地がつくられ続けていました。富沢は2つの扇状地のちょうど間にあるため、まわりよりも低く、沼や湿地の多い土地だったようです。



大きなグイマツの根株

2万年前という年代

年代を調べる方法の1つに放射性炭素^{ほうしゃせいたんそ}の量で年代を測定する方法があります。富沢遺跡ではその方法で10数点の木や炭を調べたところ、いずれも今からおよそ2万年ぐらい前の年代であることがわかりました。

しっちりん そうげん 湿地林と草原

植物では樹木の根株や幹・枝が一面に出ています。このまわりからは毬果^{まきぐり}（松ぼっくり）・葉・種子なども多数出しています。これらの植物の種類と花粉などの分析から当時の富沢の植物のようすがわかってきました。

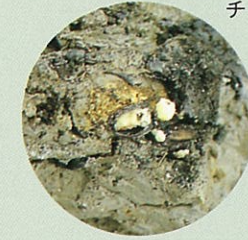
樹木はほとんどが針葉樹で、トウヒやグイマツ・モミなどでした。中でもその多くはトミザワトウヒと名づけられた新しい種類のトウヒの仲間であることがわかりました。また、カバノキやハンノキなどの広葉樹もわずかにあり、花粉からみるとハシバミやツツジの仲間なども生えていたようです。富沢ではこうした針葉樹を中心とした林がところどころにできていました。そして、その間にはスゲやカヤツリグサ、キク・セリ・カラマツソウの仲間などのやや背たけの高い草原が広がっていたようです。



トミザワトウヒの毬果



グイマツの毬果



チョウセンゴヨウの種



ケヤマハンノキの葉

樹木のまわりから見つかったもの

よく似た風景を今にさがすと

仙台から北に約1000km離れたロシア共和国サハリン南部の湿原ではアカエゾマツ（トウヒの仲間）とグイマツの湿地林がよくみられます。当時の富沢にもっとも近い風景といえます。



サハリン南部の湿地林
(中央がトミザワトウヒによく似たアカエゾマツの木)



キンスジコガネ



今の昆虫

いろいろな昆虫

昆虫はこまかな環境をよく伝えてくれる生物です。富沢では70点の昆虫が見つっていますが、その多くはゴミムシやコガネムシなど陸地にすむ昆虫の仲間でした。他には水中や湿地に生息する昆虫も出ています。



ミズクサハムシ



今の昆虫

越冬にやってきたシカ

動物のフンが20数ヶ所から多いところでは50~100コがまとまって見つかりました。形や大きさなどから、シカの仲間のフンであることがわかりました。また、フンの中には花粉が多量に含まれていたことから冬のおわりから春先にかけてのものであることが考えられます。シカの群れが越冬のために富沢にやってきて、針葉樹の枝や皮などを食べて木の根もとにフンを落としたものと考えられます。



フンの出ているようす
(一回分か?)



ニホンジカの群れ(金華山)